

2021年05月20日（木）18時 オンライン

ネット会議室：<https://meetingsapac18.webex.com/meet/pr916561688>

報告者：ハマ

<http://sets.cocolog-nifty.com/blog/2013/07/post-c74f.html>

日常性への転換、自然史的転換、言語ゲーム的転換（新書 P227）

言語ゲーム、パラドックス、規則、言葉の日常的使用、『論考』の錯誤

ラング、ランゲージとパロールとの関係からの視点

「ゲーム」と「言語」を結びつけたことで生じる諸問題。

序

同じ、あるいはほとんど同じ問題点が絶えず新たな角度から触れられ、そして常に新たな像が描かれた。……鑑賞者に一つの風景の像を提供するため、それらはうまくレイアウトされ、しばしばトリミングされねばならなかった。だから本書は、本当のところ一冊のアルバムにすぎない。（P16）

『論考』であった論理記号が『探求』ではほとんど使用されていない。

7 子供が母国を習得する際に行うゲームの一つだと想像することができる。私はそれらのゲームを「言語ゲーム」と呼びたい。

言語ゲームの規則

68 例えばテニスにおいても、どれだけの高さまでならボールを上にも打ってもよいかといった規則は存在しないが、それでもやはりテニスはゲームであり、規則も備わっているのではないか？

83 言語とゲーム(遊び)のアナロジー

ゲーム（遊び）をしながら「成り行きで規則を作る」といった場合もあるのではないか
それどころか、成り行きで一規則を変えろといった場合すらも

84 言葉の使用について、それはあらゆる点で規則によって規定されているわけではない。

87 通常の場合でその目的を果たしているなら、一道標に問題はないのだ。

88 「大体その辺に立ってくれ！」・・・「厳密でない」ことは「使用不能」を意味するわけではないのだから
「厳密でない」、これは本来非難の言葉であり、「厳密だ」は称賛の言葉である。

厳密でないものはその目的を厳密なものほどは完全に達成していない。

だからここで重要なのは、何を我々が「目的」と呼ぶのかということだ。

例：太陽の距離をメートル単位で正確に述べなければ、それは厳密ではないのか？

家具職人に机の幅を千分の1ミリ単位で正確に述べなければ、それは厳密ではないのか？

「成り行き」(パロール)が、ゲームの規則(ラング)を作る。

ゲーム(遊びながら「パロール」)しながら、規則は生まれ、変わっていく。無くなるゲームもある。

「厳密さ」の規則(基準)―ある閉じられた系(目的)によって規定されるしかない。

ロケット工学では1メートルの誤差が重大な結果を生む。

ミクロン単位：精密部品ではそれが基準単位になる。

107 現実の言語について詳しく考察すればするほど、それと我々の要求の対立はますます激しくなる。

対立は耐え難くなり、我々の要求(純粹で境界の明確なものでなければ)はもはや空虚なものになろうとしている。我々はツルツル滑る氷の上に入り込んだのだ。そこには摩擦がない。だからある意味で条件は理想的である。しかし、そのために前に進めないのだ。我々は前に進みたい。だから摩擦が必要なのだ。ザラザラとした大地に戻れ！

私(たち)は様々な「厳密さ」を生きている。「法廷」における言語から、「胃の奥あたりが痛い」と医者に伝える。「あれを取ってきてくれ」・・・

「我々は前に進みたい」ってどこなんだ。

1) 日常性への転換

116 哲学者たちが言葉―「知識」、「存在」、「対象」、「自己」、「文(命題)」、「名」といった―を用いて事物の本質を捉えようとする場合はいつも、「この言葉はその生まれ故郷の言語において現実にもそのように使われることがあるのか？」と自問しなければならない。

我々は言葉をその形而上学的使用から、日常的使用へと今一度連れ戻すのだ。

185 そこで我々は生徒にある数列(例えば「+2」)を、1000を超えて続けさせてみる、一すると生徒は、1000、1004、1008、1012、と書く。

「自分が何を書いているにか、よく見なさい！」と我々は彼に言う。

「ええ、これで正しくないのですか？こうするものだと思ったのですが」と彼は答える。

.....

新書：P283

人間の島としての自然数、同じ、規則

数列問題の不気味な生徒は、普遍的な空間に位置しているはずの人間精神が、実は極めて特異な島に住む生き物であることを我々に突きつけた。特異な島とは「自然数」という概念、およびそれと不可分な「同じ」、「規則的」、「自然な」、「以下同様に」といった概念が構成する概念系である。

これらは極めて根本的であるため、それを知らないものには例による説明しかできない。

「不気味な」という形容詞は過剰であろう。「おどろおどろしさ」は哲学探求には不要である。

解釈主義的規則観は規則を無効にする

(a1)規則のパラドックスと規則の習慣性 (198-200)

198 「記号に従う」：持続的な使用、習慣がある場合にのみ存在する。

199 ただ一人の人間が一度だけある規則に従ったということはいえな。

これはラングとパロールとの関係思い出す。

「カフカの『変身』を思わせるこの記述」、「論理の必然性と人間の孤独」とか「数と狂気という人間固有の二つの現象」などの記述は過剰であろう。

「規則（厳密さ）」を共有してしまうとはなにか。

「そこには摩擦がない。だからある意味で条件は理想的である。

しかし、そのために前に進めないのだ。我々は前に進みたい。だから摩擦が必要なのだ。ザラザラとした大地に戻れ！」

「そこ」とは『論考』なんだろうか？

「閉じた系」とするのは、相対主義に陥ってしまうのか

これまで様々な哲学系を扱ってきたが、ウィトゲンシュタインは自ら限定した境界線があり「閉じた系」それが現代の論理学なんだろう。

ただ「規則」と「日常性」との関係になると、私には「権力論」が避けられないと思う。